

モンテーニュにおける認識と選択のメカニズム に関する一考察

—両極の一致・中間との対立—（2）

奥村 真理子

III. 【極端＝極端】＜中間

本稿IIで我々が考察した、モンテーニュが両極を中間より上位にあるものとして認識する〔極端＝極端〕＞中間（本稿では仮に▽型と呼ぶ）の場合、モンテーニュは人間の精神の無数の段階の両極と中間を弁別・対比して、中間をいわば中途半端として認識し、自己が位置する中間の存在の有害性・弊害を免れるために、「単純素朴の極致」としての極端への後退もしくは中間の存在に可能な方法によるこの極端の模倣を自己の進むべき道として選択していた。このように両極と中間を、「単純素朴の極致／中途半端／学術・精神的能力の最高度の境地」として認識し、しかも「単純素朴の極致」に「学術・精神的能力の最高度の境地」に匹敵する価値を見出し、後者ではなく前者の方の極端を選択するということは、一般的あるいは伝統的な「極端／中間／極端」の概念とは大きく異なるものである。なぜなら、一般的あるいは伝統的な「極端／中間／極端」の概念とは、『ニコマコス倫理学』でアリストテレスが述べているような、「極端＝悪徳／中庸＝徳／極端＝悪徳」という認識の仕方であり、これに基づいて選択されるべきものは「中庸＝徳」であるからだ。さて、これから我々が取り上げる、モンテーニュが中間を両極より上位にあるものとして認識する〔極端＝極端〕＜中間（本稿では仮に△型と呼ぶ）の場合は、この一般的あるいは伝統的な「極端／中間／極端」の概念と大きな共通性を持つものである。我々はこの△型の中に、よく言われているモンテーニュの中庸の叡知を見出すだろう。中庸を尊重し節度を守る人生の知恵は周知のとおり、古代ギリシア人

たちの「よく生きる」ための処世訓であり、七賢人の言葉にも、アリストテレスの「中庸の徳」にも、プラトンの「節度」の思想にも表れており、さらには古代ローマ人たちにも引き継がれているものである。したがって中庸の叡知こそ、ルネサンス人モンテーニュが古代の思想から引き継ぎ、自己の人生の知恵として再生させた重要な思想の一つであると言えよう。事実、モンテーニュは
 «Moy, qui ay tant adoré, et si universellement, cet *ἀριστον μέτρον* du temps passé et ay pris pour la plus parfaite la moyenne mesure» (III, 13, p. 1102, c¹⁾) と古代以来の中庸の尊重を表明している。だが、この伝統的な中庸の叡知もまた、モンテーニュにおいては単なる伝統の踏襲ではない。また、モンテーニュが一般的あるいは伝統的な「極端<中間>極端」という認識を行なう場合にも、必ずしも「極端=悪徳/中庸=徳/極端=悪徳」という既成概念の枠に納まりきるものではないのである。

1. 「〔極端=極端〕<中間〕の多義性

モンテーニュが「〔極端=極端〕<中間〕を認識する場合、中間は必ずしも中庸ではない。また、中間を中庸として認識する場合、必ずしも中庸に絶対的な価値を認め、極端を完全に排除するわけではない。

アリストテレスは財貨に関する中庸を寛厚、両極端をけちと放漫としている²⁾が、モンテーニュも基本的にはこれと同様の認識をしている。彼は「事物の両端が一致する」例を集めた第1巻第54章の事例^⑭で吝嗇と浪費を両極端として、それらに次のような一致を見出している。

⑭ l'avarice et la profusion, (se rencontrent) en pareil desir d'attirer et d'acquérir. (I, 54, p. 312, a)

«avarice» は一応「吝嗇」と訳しておくが、語源 «avaritia» の意味も持ち、単に支出を必要以上に抑えるだけでなく金銭を集め蓄えようとする「金銭欲」、
 「貪欲」をも意味している³⁾。«profusion» も「浪費」と訳しておくが、「贅

沢」、「放漫」、「気前のよさ」も意味している。すなわち金銭を得ようとする欲を持つ *avarice* は、(1)物を得ようとする欲、(2)浪費する(した)ために借金ないしは搾取によって他人の金を得ようとする欲、(3)気前よくすることによって他人の好意を得ようとする欲を持つ *profusion* と、「得ようとする欲」いう一致を持つと想定できる。モンテーニュは自己の経済生活が「支出 > 収入 / 支出 < 収入 / 支出 = 収入」という三段階に変遷したことを詳しく語っているが、第一の時期に彼は収入のあてもなく支出し借金を繰り返した(I, 14, pp. 62-66)。また、カエサルが自己の贅沢と鷹揚さを満足させるために民衆から搾取したことを「民衆の泥棒と化した」と述べている(II, 33, p. 733, a)。さらに、ローマの私人が自費で豪華で贅沢な散財をして他人を喜ばせた習慣を、皇帝が民衆の費用で真似ること、臣下や人民の好意を得るための節度のない気前のよさを批判している(III, 6, pp. 903-905, b)。したがって、上記の *profusion* における三つの「得ようとする欲」のいずれも「吝嗇」との一致に含意されると考えられよう。このようにその原因ないし結果としての欲望において「吝嗇」と「浪費」に一致を見出すモンテーニュの認識は、「極端 < 中庸 > 極端」という既成概念を踏襲しながらもそれを越えた多義性を有していると言えよう。しかも、経済生活における中庸すなわちモンテーニュ自身の経験で言えば第三の段階を *plus plaisante beaucoup et plus réglée* (I, 14, p. 65, a)と、両極端よりも評価していることは確かであるが、単に道徳的価値のみならず楽しさ、煩わしさのないことも評価基準となっており、第一の生活(放漫)を *Je ne fu jamais mieux* (ibid., p. 62, a)と言い、必ずしも「悪徳」として認識し斥けてはいない。また、旅行中は儉約にも浪費にも節度がない(*immodérée*)ことを是認している(III, 9, p. 955, b)。さらに、モンテーニュは「吝嗇」を「飽くことのない欲望」と呼び(II, 33, p. 729, a)、悪徳を列挙する時頻繁に挙げているが⁹⁾、上記の君主の過度の気前のよさを批判する箇所では、「もし、君主の気前のよさに思慮と節度が欠けるならば、私はむしろ吝嗇家である方がよいと思う」と述べている(III, 6, p. 903, b)。したがって、モンテーニュの経済生活に関する中庸は常に絶対

的な最善性を有するわけではなく、極端も決して陥ってはならない悪徳を意味するものではないと言えよう。「吝嗇<中庸>浪費」という一般的ないしは常識的な図式はモンテーニュにとっては固定的なものではないのである。

このように△型の両極の一致には▽型と異なり、「吝嗇<中庸>浪費」のように一般に理解しやすい常識的な概念における両極の一致を見出したものが多い。しかも人間の精神の段階の両極の一致を認識する▽型と異なり、概ね誰もががいずれにも属しうる両極と中庸から成っているため、下記の快楽に関する両極の一致のようにしばしば他の事柄の判断材料としての機能を果たす。

① Le desir et la satiété remplissent de douleur les sieges au dessus et au dessous de la volupté. (I, 54, p. 312, c)

中間：	快楽	：	快楽
両極：	欲望	飽満	： 苦痛

この両極の一致の認識は「われわれの欲望は困難によって増大する」の章のモチーフとなっている。

Nous defendre quelque chose, c'est nous en donner envie:(...)Nous l'abandonner tout à fait, c'est nous en engendrer mespris. La faute et l'abondance retombent en mesme inconvenient, (...)Le desir et la jouissance nous mettent pareillement en peine. (II, 15, pp. 613-614, a)

両極：禁止(→欲求)/欠乏/欲望 放任(→蔑視)/豊富/享受：苦痛

モンテーニュはここでは、愛人の謹厳さと容易さは共にうんざりするという例も用いて、離婚を禁止されているフランス人は結婚を軽視し夫婦愛がかえって弱いこと、逆に離婚の自由を認められていた古代ローマ人は結婚を尊重し夫婦愛も強かったことを実例として、道徳の秩序や規律は刑罰によって維持されな

いことを述べている。すなわちモンテーニュは、欲望と飽満という両極の一致の認識を国家レベルの禁止と放任に適用しているのである。この両極の一致の認識はこの他、奢侈禁止令は国民の贅沢趣味を増長すること、贅沢を軽蔑させることが解決策であることを述べる時(I, 43, pp. 268—269)、宗教戦争における寛容策が分派の勢いを弛緩させる策であり、禁止による尖鋭化を防ぐためのものだという解釈を述べる時(II, 19, p. 672, a)、貞淑の掟の厳しさが女性の欲望を激しくし、掟を緩めれば鎮まることを述べる時(III, 5, p. 883, b)、詩におけるあからさまな淫猥の描写が読者を飽満させうざりさせるのに対し、慎ましい描写の効果を述べる時(*ibid.*, p. 880, b) など、様々な場合に適用されている。このように、モンテーニュが人間の本性 *nature humaine* に見出す「両極の一致」の認識は、恋愛、政治、文学など多様な領域で判断材料として機能するのである。

また、△型には中間が中庸でなく、しかも三項のうちいずれかを選択することが不可能なものもある。次の人間の年齢に関する両極の一致がそれで、そのような認識もまた、現実認識として他の事柄における判断材料となる。

⑬ *L'enfance et la decrepitude se recontrent en imbecillité de cerveau*; (I, 54, p. 312, a)

中間： (中間の年齢) : (明晰)

両極：幼年 老年：頭の弱さ

モンテーニュはこの認識を「年齢について」の章で自己の場合も引き合いに出してより詳しく述べている。

Quant à moy, j'estime que nos ames sont denouées à vingt ans ce qu'elles doivent estre, et qu'elles promettent tout ce qu'elles pourront. (...) Quant à moy, je tien pour certain que, depuis cet aage (=trent ans), et mon esprit et mon corps ont plus diminué

qu'augmenté, et plus reculé que avancé. Il est possible qu'à ceux qui emploient bien le temps, la science et l'expérience croissent avec la vie; mais la vivacité, la promptitude, la fermeté, et autres parties bien plus nostres, plus importantes et essentielles, se fanissent et s'alanguissent. (I, 57, pp. 327-328, a)

中間： 20歳～30歳 : 肉体的・精神的能力の頂点
両極：～20歳 30歳～：劣る／未熟・老化

法律の変更に対し慎重なモンテーニュが、ここではこの認識と人間の生命のはかなさの認識に基づいて、財産管理の権利を25歳未満の者に認めず若者を職に就けなくしている当時のフランスの法律を批判している。このように三者択一の不可能なこの「〔極端＝極端〕＜中間＞」の認識は判断材料として機能しているが、さらに他の認識を表現するための比喩としても機能している。

l'entendement humain se perdant à vouloir sonder et contreroller toutes choses jusques au bout; tout ainsi comme, laissez et travaillez de la longue course de nostre vie, nous retombons en enfantillage. (II, 12, p. 556, a)

中間： 理解／中間の年齢
両極：混乱／幼児 徹底的探究／老人

モンテーニュは人間の理解力が辿る過程を人生に喩え、探究と検討によって混乱から理解へと至った理解力がさらにあらゆる事柄を徹底的に探究・検討して再び混乱に陥ることを、成長することによって未熟から成熟へと至った人間が人生の長い行程に疲労困憊して幼児と同じ状態に戻ることに喩えているのである。

△型には、対立する両極が結果的に一致するという認識のみならず、極度の愛情が極度の憎しみを、極度の忍耐が極端な復讐を生む (III, 5, p. 865, b;

p. 872, b)という一方の極端が原因、他方が結果という両極の一致の認識も数多く存在する。モンテーニュは極端な感情に捉えられないようにしており⁶⁾中庸を選択しているが、この感情に関する両極の一致の認識も上記の幼年と老年の一致と同様、次のように比喩としても機能する。なおここには三者択一の不可能な健康と病気に関する両極の一致も比喩として機能している。

Comme elle (= âme) lasse aussi et trouble ordinairement soymesmes. Qui la desment, qui la jette plus coustumierement à la manie que sa promptitude, sa pointe, son agilité, et en fin sa force propre? (b) Dequoy se faict la plus subtile folie, que de la plus subtile sagesse? Comme des grandes amitez naissent des grandes inimitiez; des santez vigoreuses, les mortelles maladies: ainsi des rares et vifves agitations de nos ames, les plus excellentes manies et plus detraquées; il n'y a qu'un demy tour de cheville à passer de l'un à l'autre. (II, 12, p. 492, a, b)

極端：最も過敏な錯乱 ←—— 最も過敏な知恵
紙一重
激しい敵意 ←—— 最も厚い友情
命取りの病気 ←—— 最も逞しい健康

以上のように両極端を中間より上位に認識し一方の極端を選択していた▽型の場合と異なり、より一般的ないしは伝統的な△型の認識をモンテーニュが行なう場合、中間は必ずしも最善性を有する中庸ではない。極端に関してもモンテーニュは必ずしも常に避けるべき悪徳として認識するわけではなく、最善性とは言わないまでもその良さを認め受け入れる。また、△型の両極の一致の認識は必ずしも両極端と中間のうちいずれかの選択へと向かうものではなく、それを基に他の事柄に関する判断をもたらす材料として、あるいは他の両極の一致を表現するための比喩として機能するのである。判断材料としての機能につ

いては、学問的理論ではなく現実から直接得た認識を基に判断を行なうモンテーニュの方法の特徴をここにも見ることができよう。比喩としての機能については、△型が一般に理解しやすく受け入れられやすい認識である場合にこの機能が見られ、誰にでも分かりやすい比喩を用いるソクラテスを称賛するモンテーニュが（III, 12, p. 1037）、自著において平易な比喩を実践していると言えよう。このようにモンテーニュの△型の両極の一致の認識は多義性を有するのである。

2. 中庸の選択

(1) 中庸の基準、範囲、限界の指標

以上のように多義性を有するモンテーニュの△型の両極の一致の認識のうち、両極端の回避、中庸の選択を明確に表すものを次に考察しよう。ここにおいてモンテーニュの中庸の叡知は発揮されるのだが、まずそのような認識の対象と、そこにおける中庸と極端の指標をみていくことにしよう。

A. 心身の快適さ：快楽と苦痛

モンテーニュが「〔極端＝極端〕＜中庸〕という認識をし、中庸を自己の生き方として選択する場合、その基準となるものの一つは快楽ないしは快適さと苦痛ないしは不快さである。モンテーニュは隠棲生活を営む者に適した仕事の仕方を述べる時、次のように述べている。

Il doit avoir prins congé de toute espece de travail, quelque visage qu'il porte; et fuir en general les passions qui empeschent la tranquillité du corps et de l'ame, (...) Au menage, à l'estude, à la chasse et tout autre exercice, il faut donner jusques aux derniers limites du plaisir, et garder de s'engager plus avant, où la peine commence à se mesler parmy. Il faut reserver d'embesoinnement et d'occupation autant seulement qu'il en est besoing pour nous tenir en haleine, et pour nous garantir des incommoditez

公を「間違っただ、不自然な行き方」と呼んでいる（III, 10, pp. 1003, 1006—1007）。すなわち、何事であれ自己の心身の快適さを失い肉体的および精神的苦痛や不快を感じる程物事に深入りしすぎないこと、執着しすぎないこと、「快樂の最後の限界」以内に止めておくこと、これがモンテーニュにとっての多忙という極端に陥らない中庸の範囲であり、快樂ないしは快適さの範囲なのである。このように自己の心身の快適さと不快さという自己の感覚を中庸と極端の指標としていることは注目に値する。

B. 理性の適用範囲：有用性と有害性

モンテーニュの中庸の叡知において、彼に固有とは言えないまでも彼の思想の特徴が著しく表れているものは、人間の知的活動あるいは理性の行使における中庸と極端の認識である。すなわち、学問・理性・徳という本来人間に節度を教えて賢明にするはずのものに関して、不足の極端と同等の有害性を有するものとしての過度の極端および中庸の必要性を認識しているのである。

学問の中庸を越えた極端はモンテーニュにとって、人間の知的能力（理性raison）の限界を越えることであり、彼はこれを自惚れとして頻繁に批判するが、次の文章ではそれを両極の一致として表現している。

Ainsin est-il advenu en l'escole de la philosophie: la fierté de ceux qui attribuoient à l'esprit humain la capacité de toutes choses causa en d'autres, par despit et par emulation, cette opinion qu'il n'est capable d'aucune chose. Les uns tiennent en l'ignorance cette mesme extremité que les autres tiennent en la science. Afin qu'on ne puisse nier que l'homme ne soit immodéré par tout, et qu'il n'a point d'arrest que celui de la nécessité, et impuissance d'aller outre. (III, 11, p.1035, b)

モンテーニュは人間の精神が全能であると断定することも、無能であると断定することも、同じく極端であり、節度（中庸）を欠いており、人間の精神に自

惚れることだと認識しているのである。したがって、ここに記されていない中庸は、人間の精神に対する懐疑的な判断保留であろう。モンテーニュが頻繁に表明している、奇跡や魔術や神意など人間の認識を越える事柄に関する判断保留は、人間精神の能力に対する懐疑的な態度に基づくものであるが、彼にとっては人間の精神の起源や本質や材料や人間の肉体に占める位置を論じることまた、人間の精神の能力に対する自惚である。モンテーニュは「レーモン・スボン弁護」で、そのような人間の精神に関する哲学の諸説を列挙した後、我々が本稿のⅢ.1で引用した、人間の理解力は突き詰めると混乱に陥るという両極の一致を、老人が幼児に戻ることに喩えて述べるのであるが、列挙の途中にも諸説の滑稽さを指摘する次のような両極の一致を述べている。

Les extremités de nostre perquisition tombent toutes en esblouissement: comme dict Plutarque de la teste des histoires, qu'à la mode des chartes l'orée des terres cognuës est saisie de marets, forests profondes, deserts et lieux inhabitables. Voilà pourquoy les plus grossieres et pueriles ravasseries se trouvent plus en ceux qui traittent les choses plus hautes et plus avant, s'abysmans en leur curiosité et presumption. La fin et le commencement de science se tiennent en pareille bestise. (II, 12, p. 544, c)

モンテーニュは人間の知的能力を越えた事柄までも追求する人々が他の人々以上に「最も無教養な幼稚な空想」を行なうことを見出し、無教養な者や幼児に見られる学問上の愚かさと同じ愚かさという両極の一致として認識するのである。モンテーニュの△型の両極の一致の認識において人間の知的能力の極端な行使と一致する他方の極端は愚かさだけではない。我々がⅢ. 1.で引用したように狂気もまた他方の極端に置かれる。Ⅲ. 1.で引用した文章はこの両極の一致を述べたパラグラフの一部で、ここに全体を引用することはスペースの都合上できないが、この後モンテーニュは最高度の精神の鋭敏さ・活発な活動と

狂気との結びつきを表す表現を10回も繰り返しているのである。このようにモンテーニュは人間の知的能力の限界を越えた極端を同じ自惚れの両極端として、理性や知性と対照をなす混乱や愚かさや狂気との一致として認識するのである。モンテーニュは「レーモン・スポン弁護」の冒頭で学問を *«une tres-utile et grande partie»* と呼んでいるとおり学問の有用性を認めているのだが、上記のように学問が人間にもたらすはずのものとは逆の極端と一致する程の有害性を過度の学問に認識するため、同所で述べているように、最善性や知恵と満足の源としての価値を学問に与えることを *«mesure extreme»* と呼ぶのである（II, 12, p. 438, a）。逆に言えばモンテーニュにとって学問とは人間の諸能力のうちの一つの部分でしかなく、有用性において、ないしは他の箇所ではしばしば述べているように楽しさにおいては価値を持つが、もし学問が人間に害をもたらすものに陥れば、モンテーニュはこれを節度の無さ *«immodération»* および極端として認識するのである。まさに *«De la modération»* と題した章でモンテーニュはプラトンの対話編中のカリクレスの言葉として（だが、これは引用というよりはむしろモンテーニュ流の要約である¹⁰⁾）、哲学を適度に *«avec modération»* 学ぶという楽しく有用な範囲を越えて過度に学ぶことを極端と呼び、的を越した矢と突然の強烈な光に喩え、的に達しない矢と同じく失敗、突然の暗闇と同じく視覚を妨げるものとして認識するのである。

L'archer qui outrepatte le blanc, faut comme celui qui n'y arrive pas. Et les yeux me troublent à monter à coup vers une grande lumiere également comme à devaler à l'ombre. Calliclez, en Platon, dict l'extremité de la philosophie estre dommageable, et conseille de ne s'y enfoncer outre les bornes du profit; que, prise avec moderation, elle est plaisante et çommode, mais qu'en fin elle rend un homme sauvage et vicieux, desdaigneux des religions et loix communes, ennemy de la conversation civile, ennemy des voluptez humaines, incapable de toute administration

politique et de secourir autrui et de se secourir à soy, propre à estre impunement souffletté. Il dict vray, car, en son excès, elle esclave nostre naturelle franchise, et nous desvoye, par une importune subtilité, du beau et plain chemin que nature nous a tracé. (I, 30, p. 198, c)

ここでモンテーニュがカリクレスの言葉として述べている野蛮さと不徳は反社会性と反自然性であると言えよう。特に最後の文では自然な人間性からの逸脱がモンテーニュ自身の言葉として強調されている。モンテーニュが過度の徳に見出すものもまた人間の自然な快楽を損なう有害性であり、徳の不足と同様不徳として認識することを次に見ていこう。

C. 人間存在の正しい享受

Aで考察したように仕事や恋愛について苦痛が混じらない快楽の範囲を中庸として認識し、Bで見たように理性の限界を学問の中庸の範囲として認識しているモンテーニュは、理性による快楽の節制を旨とする徳にも中庸の範囲とそれを越えた極端を認識する。たとえば彼が「レーモン・スボン弁護」の貴婦人への献辞の中で学問の極端が悪徳であることを述べる時、〈sciences, ausquelles l'extremité est vitieuse, comme en la vertu〉(II, 12, p. 558, a)と、徳の極端を悪徳と呼んでいる。また、「節制について」の章でも〈Nous pouvons saisir la vertu de façon qu'elle en deviendra vicieuse, si nous l'embrassons d'un desir trop aspre et violant〉と言い、〈Ne soyez pas plus sages qu'il ne faut, mais soyez sobrement sages〉(I, 30, p. 197, a)と、モンテーニュが書斎の天井に記していた57の格言の一つである賢明さにおける中庸を説く聖パウロの言葉を引用するのである。たしかにモンテーニュは快楽における中庸を支持しているのだが、「私は自然に従うだけだ」と、学問が命じる節度ではなく、自然に従うことを中庸としている (ibid., p. 198, a, c)。すなわちこの章の眼目はむしろ、どのような正当な快楽にも節度を課そうとする人間の学問の節度の無さに対する批判なのである。

モンテーニュは、付随的な外的幸福に関しても、これを快適な限り利用することをよしとし、幸福の主要な基礎とすることも完全に拒否することも適切でないとは判断している。

Il se faut servir de ces commoditez accidentales et hors de nous, en tant qu'elles nous sont plaisantes, mais sans en faire nostre principal fondement: ce ne l'est pas; ny la raison ny la nature ne le veulent. Pourquoy contre ses loix asservirons nous nostre contentement à la puissance d'autruy? D'anticiper aussi les accidens de fortune, se priver des commoditez qui nous sont en main, comme plusieurs ont fait par devotion et quelques philosophes par discours, se servir soy-mesmes, coucher sur la dure, se crever les yeux, jeter ses richesses emmy la riviere, rechercher la douleur (….) c'est l'action d'une vertu excessive. (I, 39, p.243, a)

中間：	快適な限り利用	：	中庸
両極：	主要な基礎	完全に拒否	：不徳

たしかにモンテーニュは付随的な外的幸福のみに依存することも批判しているが、逆に手中にある付随的な外的幸福を完全に拒否する苦行僧や哲学者の禁欲主義を「行き過ぎた徳」〈*vertu excessive*〉と呼び、これに対する批判の方に力点を置くのである。これまで述べてきたように、心身の快適さ（自己の健全で愉快的な生活）を事物との関わり方における中庸の範囲とし、人間の理性を有用で楽しい範囲内でのみ使い、自然から与えられた快樂ばかりでなく現在自己が所有している付随的な外的幸福をも快適な限り享受しようとするモンテーニュの中庸とは、あらゆる面で現在の自己の存在を正しく享受しようとすることであると言えよう。さて、自己の存在の根本とも言えるものは、現在生きているということ、いつかは死ぬということ、すなわち死すべき生であろう。モ

モンテーニュは生も死もあるがままに享受しようとし、次のように一致する両極端を認識している。

J'avoy desjà gaigné cela de ne tenir à la vie que par la vie seulement; (...) Dieu veuille qu'en fin (...) elle (=colique) ne me rejette à l'autre extremité, non moins vitieuse, d'aymer et desirer à mourir!

Summum nec metuas diem, nec optes.

Ce sont deux passions à craindre, mais l'une a son remede bien plus prest que l'autre. (II, 37, p.760, a)

モンテーニュがここに引用しているマルティアリスの言葉「死を恐れても、望んでもいけない」からも分かるとおり、これらの感情を持つべきではないという考え方はモンテーニュ独自のものではなく古くからあったものであろう。だがモンテーニュが、御し易さの違いを認めてはいるが、死の恐怖と愛慕とを「同じく不徳」「ふたつの恐れるべき情念」と、一致する両極端として認識している点に注目しよう。上記引用文は1580年版のテキストだが、モンテーニュは1588年以後、「哲学することとは死ぬことを学ぶこと」の後半部における「我々の母なる自然」の台詞に、死を恐れる人間に不死の生の辛さを説く言葉とともに、死に対する両極端の感情に関するこのような認識を次のように「中庸」〈moderation〉という語を用いて挿入している。

Pour vous loger en cette moderation, ny de fuir la vie, ny de refuir à la mort, que je demande de vous, j'ay temperé l'une et l'autre entre la douceur et l'aigreur. (I, 20, p. 96, c)

これらの文章から次のような「〔極端=極端〕〈中間〉」の認識が見出せよう。

中庸： 生も死も率直に受け入れること

極端：生を避けること
（死の愛慕）

死から逃げること
（死の恐怖）

モンテーニュが精神的快楽とともに肉体的快楽を快適な範囲内で享受しようとし、生も死も率直に受け入れようとするのは、それらがいずれも自己の人間存在を構成する要素であると考えるからである。モンテーニュは、人間の精神面のみを重視して肉体面を軽視する人について、食事中も思索に耽る人や、入浴中に原理を発見して裸で風呂場から飛び出したアルキメデスや、歩きながら小便をするアイソポスの先生を例に挙げて次のように述べている。

Entre nous, ce sont choses que j'ay tousjours veuës de singulier accord: les opinions supercelestes et les meurs sousterraines.(…) Ils veulent se mettre hors d'eux et eschapper à l'homme. C'est folie: au lieu de se transformer en anges, ils se transforment en bestes; au lieu de se hausser, ils s'abattent.(III, 13, p.1115, c,b)

両極：地面よりも低い品行（奇妙な一致） 天よりも高い思想
獣になる ← 天使になろうとする
落下する ← 高く舞い上がろうとする

精神と同じく人間存在を構成する大切な基本的要素である生理的欲求や身体の快適さや肉体的快楽に費やす時間を惜しみこれらを蔑ろにすることを、人間存在の超越¹¹⁾と人間以下の状態への墮落という、両極の一致として認識しているのである。さらにモンテーニュは、アレクサンドロスの不死化の願望を揶揄したフィロタスの手紙を引用して、次のような両極の一致とこれに対立する中庸の認識を表す文章を続けている。

Et de nos sciences, celles-là me semblent plus terrestres et basses qui sont le plus haut montées. (….) C'est une absolue

perfection, et comme divine, de scavoynr jouyr loiallement de son estre. Nous cherchons d'autres conditions, pour n'entendre l'usage des nostres, et sortons hors de nous, pour ne sçavoir quel il y fait. (ibid., b)

中庸： 人間存在の正しい享受

両極：最も現世的で低俗な学問 ← 最も天上的学問

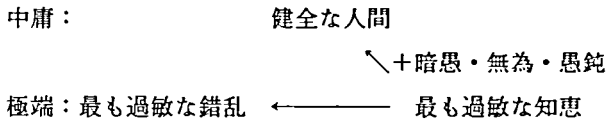
すなわち、『エッセー』の終章の最終部分に位置するこれらの文章は、我々がこれまで述べてきた、「自己の心身の快適さ」（自己の健全で愉快的生活の正しい享受）、「人間の理性の適用範囲」（理性の正しい享受）、という中庸を包含し統合する「自己の人間存在の正しい享受」という中庸とそれを逸脱する両極端の一致の認識を総括していると言えよう。本稿III.1.で我々は△型の両極の一致・中間との対立の認識が多義性を有し、必ずしも最善性を持つ中庸としての中間の選択へモンテーニュを向かわせるものではないことを述べたが、この「自己の人間存在の正しい享受」という中庸とその両極端の認識においてこそ、中庸は「神のごとき完成」とさえ呼ばれ最善性として認識され、選択されるのである。

(2)中庸を得るための方法

この中庸から逸脱しないためにモンテーニュはどのような方法を用いているかを次に考察しよう。

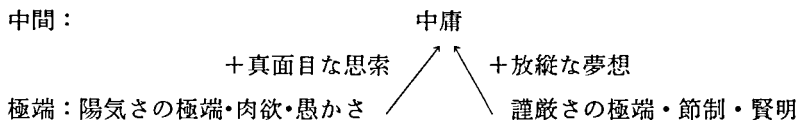
我々がIII. 1.および2.で取り上げた過敏な知恵と過敏な狂気という両極の一致の認識を述べる文章に続いてモンテーニュは次のように書いている。

Voulez vous un homme sain, le voulez vous réglé et en ferme et seure posteure? affublez le de tenebres, d'oisiveté et de pesanteur. (II, 12, p. 492, a)



このように意志だけでは極端へと向かう力を直接抑制することができない場合には、現在位置する極端と逆の要素を与えることが、モンテーニュが中庸の範囲から逸脱しないために取る方法である。次の文章はモンテーニュがこれと同様の方法を自己に適用していることを明らかに示している。

J'avoy besoing en jeunesse de m'advertir et solliciter pour me tenir en office ; l'alegresse et la santé ne conviennent pas tant bien, (c) dict-on, (b) avec ces discours serieux et sages. Je suis à present en un autre estat; les conditions de la vieillesse ne m'advertissent que trop, m'assagissent et me preschent. De l'excez de la gayeté je suis tombé en celuy de la severité, plus fâcheus. Parquoy je me laisse à cette heure aller un peu à la desbauche par dessein; et emploie quelque fois l'ame à des pensemens folastres et jeunes, où elle se sejourne. Je ne suis meshuy que trop rassis, trop poissant et trop meur.(…) Je me deffens de la temperance comme j'ay faict autresfois de la volupté. Elle me tire trop arriere, et jusques à la stupidité. Or je veus estre maistre de moy, à tout sens. La sagesse a ses excés, et n'a pas moins besoin de moderation que la folie.(III, 5, p. 841, b, c)



モンテーニュは、極端に陽気だった若い頃は真面目で賢明な思索をあえて行

ない、逆に謹厳さの極端に陥っている年老いた今は意図的に放縱な夢想をしている。その一例がこの文章の書かれている「ヴェルギリウスの詩句について」の章であり、ここで彼は大胆直截に性愛について語っているのである。いずれの場合も、現在陥っている極端とは逆の要素を自己に与えることによって、バランスを取ろうとしているのである。モンテーニュはこのように逆の要素を自己に加えることによってバランスを得るのだが、そのためには自己の状態が「極端／中庸／極端」のどこに位置するかということを経験しなければならぬ。また、一旦バランスを得ても自己の内に一方の極端へと向かおうとする傾向が存在する限りその逆の要素を与え続けねばなるまいし、反対に一方の極端に陥るまいとして逆の要素を与えすぎて他方の極端に陥ることもあろうし〔事実、モンテーニュは自分の願望に引きずられまいとするあまり逆の極端に陥る恐れがあることを自覚している (ibid., p. 1013, c)]、若い頃必要だった要素と年老いた今必要な要素が異なるように、その時々自己の状態に応じて自己に与える要素とその程度を変えなければならないから、刻々と変化する自己の状態の認識を不断に繰り返し行なわねばなるまい。モンテーニュの△型の両極の一致・中間との対立の認識とはそれ自体、中庸から逸脱することを避けるための方法となっていると言えよう。これは、自己の心身の快適さを中庸とする物事への専心の程度についても言えることで、自己が無為や多忙によって苦痛や不快を感じているかどうか、自己の心身の感覚に注意を向けること自体、中庸から逸脱しないための方法である。また、理性の適用範囲についても、理性の極端な濫用が理性とは逆の極端と一致するほどの害をもたらすという認識そのものが、モンテーニュを理性の適用範囲内に止まらせるのである。したがって、モンテーニュが△型の両極の一致・中間との対立の認識を不断に行なうことこそ、モンテーニュを中庸の叡知へと向かわせると言えよう。

(続く)

注

- 1) *Essais* のテキストは VILLEY-SAULNIER 版(2 vol., 1978) を用いた。引用に関する詳細は拙稿(1) (『広島大学文学部紀要』第49巻, 1990, pp. 202—227) の注1)を参照されたい。
- 2) アリストテレス『ニコマコス倫理学』第四巻第一章 1119b 22—1122a 18。
- 3) Cf. Edmond HUGUET, *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, Didier, 1925, t. I, pp. 428—429; *Montaigne, Essais adaptation et traduction en français modernes* par André LANLY, I, Ed. Slatkine, 1987, p. 336, note 15; Michel de Montaigne, *Les Essais* publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat STROWSKI, 5 volumes en 3 volumes, III, (V) Lexique de la langue des Essais et index des noms propres par Pierre VILLEY, Hildesheim—New York, Georg Olms Verlag, 1981, p. 70.
- 4) Villeyは <profusion> に相当する現代フランス語を <prodigalité> とし、I, 54のこの文を例文として挙げている。Id. *ibid.*, p. 539. なお *Essais* における <profusion> の使用頻度は三回 (Roy E. LEAKE, *Concordance des Essais de Montaigne*. Genève, Librairie Droz, 1981, t. II, p. 1022)。この文以外の用例はII, 33, p. 733, a: <D'un homme liberal elle en rendit un voleur publique pour fournir à cette profusion et largesse> ; III, 6, p. 905, b: <Mais c'estoyent particuliers qui avoyent nourry cette coustume de gratifier leurs concitoyens et compaignons principalement sur leur bourse par telle profusion et magnificence> .
- 5) I, 26, p. 158, a; p. 160, c; I, 31, p. 206, a; I, 39, p. 239, a; I, 56, p. 319, b; p. 324, c; II, 12, p. 444, c; p. 486, a; p. 503, a; III, 5, p. 893, b; III, 6, p. 910, b; III, 9, p. 946, b; III, 10,

Considérations sur le mécanisme de la connaissance et du choix chez Montaigne

—correspondance entre les deux extrêmes et opposition du milieu aux extrêmes—(2)

Mariko OKUMURA

Montaigne exprime souvent ses pensées en opposant le milieu et les deux extrêmes qui, eux, manifestent une analogie. Dans notre dernier article (1), nous avons distingué quelques données primordiales qui constituent les éléments fondamentaux du mécanisme du jugement chez Montaigne sous la forme suivante: (extrême=extrême) ≠ milieu, et dans le premier cas où les extrêmes sont supérieurs au milieu: (extrême=extrême) > milieu, nous avons constaté que cette connaissance déclenche chez l'auteur un mécanisme de la connaissance de soi, qu'il se considère comme étant à la mesure de la moyenne des hommes, et un mécanisme du choix qui se porte dans la plupart des cas sur l'extrême inférieur.

Cet article est consacré au deuxième cas où les extrêmes sont inférieurs au milieu: (extrême=extrême) < milieu. Cette connaissance est en relation avec l'idée de mesure ou du juste milieu qui remonte à l'Antiquité gréco-romaine. Mais chez Montaigne la connaissance de l' <(extrême=extrême) < milieu> ne sert pas seulement de base au choix du milieu en tant que moyenne mesure excluant la démesure. Une connaissance de l' <(extrême=extrême) < milieu> concernant une chose lui sert quelquefois de prémices pour porter d'autres jugements, à d'autres moments elle lui sert de point de référence et de comparaison

quand il s'agit d'exprimer des jugements analogues. De plus le juste milieu ne signifie pas toujours la modération en tant que vertu, et les extrêmes ne signifient pas toujours le vice. On peut donc dire que la connaissance de l' <(extrême=extrême) < milieu> exerce de multiples fonctions et qu'elle est polysémique.

Mais quand Montaigne se tient exactement à mi-distance des deux extrêmes observant dans toute la rigueur du terme le juste milieu, la connaissance de l' <(extrême=extrême) < milieu> exprime de toute évidence sa sagesse et sa modération. Il nous faut alors distinguer deux critères. Le premier est la tranquillité de l'âme et du corps. Montaigne s'adonne avec modération à tous exercices du corps et de l'esprit pour ne pas troubler la paix de l'âme et du corps par ces deux extrêmes que constituent l'oisiveté et les travaux pénibles. Le deuxième critère est la mesure de la raison. Pour Montaigne les facultés intellectuelles de l'homme ont un <extrême> qui est l'orgueil, la bêtise puérile, la confusion des idées et les maladies mentales; ces défauts peuvent empêcher le fonctionnement adéquat des dites facultés. C'est pourquoi il considère que la science a des limites et ne lui reconnaît de valeur que dans la mesure où elle est utile et plaisante. Ces deux critères aboutissent à un troisième critère qui est celui du plaisir normal auquel a droit l'être humain: Montaigne considère l'excès de vertu qui consiste à se refuser tous les plaisirs de la vie comme aussi vicieux que l'intempérance; il veut garder le juste milieu entre l'extrême qui est de fuir la vie et l'autre extrême qui est de reculer devant la mort; il trouve que les pensées <supercélestes> s'accordent avec les mœurs les plus ignobles et que les sciences qui transcendent l'être humain sont ignobles.

Le moyen qu'emploie Montaigne pour observer la juste mesure à

partir de ce critère est de faire appel à l'élément contraire de l'extrême où il se trouve. Par exemple il s'obligeait à penser à des problèmes sérieux quand, jeune, il était trop enclin à la volupté et il se laisse aller exprès dans une certaine mesure à l'intempérance et même parfois à des rêves voluptueux quand avec l'âge il devient trop sérieux. Mais pour cela il lui faut reconnaître exactement en quel endroit du schéma <(extrême=extrême)< milieu> il se trouve. On peut donc dire que la connaissance de l' <(extrême=extrême)< milieu> conduit elle-même Montaigne à la modération lorsqu'il tire un profit raisonnable des plaisirs de la vie.

(A suivre)